

フェミニズムあるいはフェミニズム以後

梅光女学院大学公開講座
論集 第28集

佐藤泰正編

笠間選書 163

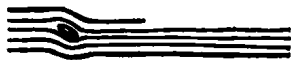


フェミニズムあるいはフェミニズム以後

梅光女学院大学公開講座
論集 第28集

佐藤泰正編

笠間選書 163



笠間書院

■執筆者紹介

宮野 光男 教授
井上 洋子 福岡女子短期大学講師
朱雀 成子 教授
常岡 晃 教授
広岡 義之 講師
富山太佳夫 成城大学助教授
松尾 文子 講師
森田美千代 助教授
中村都史子 教授
安富 俊雄 講師
佐藤 泰正 教授・文博

笠間選書 163 フェミニズムあるいはフェミニズム以後

1991 年 1 月 31 日 初版第 1 刷発行

定価 1,030 円 (本体 1,000 円)

編者 佐藤泰正◎

発行者 池田つや子

印刷 大文社小石川

製本 有限会社 笠間製本所

発行所 笠間書院

〒101 東京都千代田区猿楽町 2-2-5

電話 03-3295-1331 (代) 振替東京 1-56002

書籍コード 1391-953163-0924

目次

近代日本文学のなかのマリアたち——矢代静一「写楽考」を中心にして——	宮野光男	1
「ゆき女きき書」成立考——右牟礼道子とフェミニズム——	井上洋子	25
シェイクスピアとフェミニズム	朱雀成子	45
フランス文学におけるフェミニズムの諸相 ——スタンダールとボーヴォワールを中心に——	常岡晃	63
女性の現象学——ホイテンデイクとボルノーに学びつつ——	広岡義之	83
フェミニスト批評に対して	富山太佳夫	103
言語運用と性	松尾文子	119
アメリカにおけるフェミニズムあるいはフェミニスト神学	森田美千代	139
山の彼方にも世界はあるのだろうか——現代スカンジナビア女流文学の一断面	中村都史子	159
スポーツとフェミニズム——身体解放とスポーツ——	安富俊雄	177
近代文学とフェミニズム——あとがきに代えて——	佐藤泰正	197

宮野光男

近代日本文学のなかのマリアたち

——矢代静一「写楽考」を中心にして——

*
* *

矢代静一は、浮世絵師三部作〔「写楽考」昭和四七、三 〔「北斎漫画」昭和四八、六 〔「淫乱斎英泉」昭和五〇、七〕序篇ともいうべき一幕ものの戯曲「宮城野」〔昭和四一、一二〕の自註で次のように述べている。

《ぼくの戯曲に『宮城野』という作品がある。これは、画家東州斎写楽がいたころの江戸時代を舞台にして、淫売婦の宮城野という女を主人公にしたもので、史実とは全く関係ないフィクションではあるが、打ち明けて言えば、宮城野という女こそ、「ぼくのマグダラのマリア」ともいうべき女なのであった。》〔「マグダラのマリア―真の愛にめざめた女―」『魔性と聖性』昭四八、六〕

矢代にとって、マグダラのマリアを描くということは、自らの生きかたの問題として、へマグダラ

のマリアのように、鮮かな変貌をとげられた人が、かつて、現実にいたということは、わたしのうに、怠惰で心弱い者にとつては、大きな励ましになる」〔同前〕からであるが、それと同時に、作家矢代にとつて、彼女が両義性をもった、魅力的な女性だからである。

矢代と杉浦幸雄との対談（「写楽から始めて」昭四六、十一）のなかで、宮城野という女性は、写楽描くところの、へ女形中山富三郎の扮するところ「宮城野」で、矢代好みの女性像であるへ白痴なのか、それともひじょうにピュアなのか、つまりへ無知と無垢が一緒のような感じの女」〔同前〕の、ひとつの典型であると言われているが、このところに、矢代の描こうとする女性像の基本的なイメージが語られているのである。

マグダラのマリア―聖書に登場する魅力的な女性マグダラのマリアに関して、教会の歴史が、今日までにどのように扱ってきたかという問いに対して答えるのは、

『初代教会時代の最初のマグダレーナ物語にはじまり、中世のマグダレーナ伝説を経て中世マグダレーナ美術で最盛期を迎え、近代の文学にまで発展していったマグダレーナ文化である。そこではマリア・マグダレーナの運命が描きつくされ、さらに夢想され、教義化された。』（E・モウルトマン＝ヴェンデル 大島かおり訳『イエスをめぐる女性たち』新教出版社 一九八二、三）

と言われているように、古来、聖書解釈史に見られる歴史的特色を敏感に反映しながら、一人の女性像として形象され位置づけられてきた存在である。

本来ならば、へ彼女に対する福音宣教の依託、彼女の癒しと召命、イエスに対する彼女の特別な関

係という三要素が、聖書におけるマグダラのマリアの本質であり、イエスとの関わりのなかにあつて、へ生前のイエスに感受性と理解とをもつて従つていた、そしてへ他のいかなる女性によつてもなしとげられなかつたもの、聖母マリアによつてもやはり果たされえなかつたものが、マリア・マグダレーナのやさしさをその本質とし、人間の根元的存在性の本質として認めるところのキリスト教のなかに可能となる人間観によつて支えられている、へ全人的に癒された一人の人間であり、へ宣教するマグダラのマリアであるべきものが、へ多様な解釈を許す、感動をさそう危険な婦人の像、イエスの女友達で、もと売春婦、活動的なベタニアの妹であるマリア・マグダレーナとして、へ父権制的な教会の中でつくりあげられ、女性の犠牲においてまかり通つてきた（同前）、というのである。

聖書におけるフェミニズムの問題としてマグダラのマリアを取り上げるということは、一面においてこのような、聖書解釈史上の問題があるわけで、そのためには、へ聖書は女性の偉大さ、自主性、叡知、勇気の、世界で唯一無二の物語を内蔵している。それはおそらく女性解放の最も興味ぶかい書物（同前）であることを実証していかなくてはならないのであるが、モウルトマン自身が述べているように、女性たちが、失われたものを取り戻し、放棄せしめられた自主性、主体性を本當の意味で取り戻すことができるためには、へテオ（神）・ファンタジー（想像力）が不可欠（同前）なのである。そのときはじめてへ捨てさせられた自発性を取り戻し、へ全体的な生活感情に根ざして考え、感じ、生き、行動すること（同前）ができるのである。

モウルトマンによって紹介されているエルンスト・エッグマンの、へわたしは想う、／一切の道徳にうちかつた／歴史のそとなる／この夜を。／あなたが彼女をかき抱いたとき、／彼女の献身は／神の愛のように／大きかつた、という作品は、へ長いあいだ切り離されてきたエロースとアガペー、官能的な愛と精神的愛とが、たがいを見出した、ひとつの表現であるというわけであるが、近代日本文学において、マグダラのマリアを描きながら、愛に生きること、人間としてのリアリティを表現の要としながら、ヘテオ・ファンタジーとしての可能性を追い求めたひとつの姿を、矢代のドラマのなかにも見ようとするのが、本論の目論見なのである。

さて、矢代にとってマグダラのマリアという存在は、へ鮮やかな変貌をとげられた人へであるという意味で、信仰のレベルでの理想的女性像であるが、へ聖性へのひとつの表現がへ無知と無垢へーへ白痴なのかそれとも非常にピュアなのかへわからないほどにーの同時的存在性をそのなかに見ることができるとあるという意味で、人間論としては背理性をその本質としているところの魅力を形象したものである。

矢代の「宮城野」自註からも明らかなように、矢代がマグダラのマリア性に与えた表現の可能性の一面は、淫売婦という生業によって表現することができるもの、つまりその娼婦性におかれているところに、ひとつの特色を見ることができるところについては先の「宮城野」論^註において明らかにしたところであるが、矢代の描くマグダラのマリアの表現の可能性には、もうひとつの側面がある

ことを、矢代は次のように述べている。

《ひよつとすると、彼女は貧しいが善意で心やさしく、人になにかを与えることを喜びとしていた女ではなかったのでしょうか。なにかとは、抽象的にいうなら「愛」です。一人の友達が病氣になれば、眠いのを我慢して徹夜で看病してあげる。一人の友達が、餓飢大將にいじめられたら、負けるのを承知で、餓飢大將に刃向って行く。とまあ、そういった無垢な心の持ち主だったような気がします。》〔マクダラのマリア(三)』『聖書—この劇的なもの』主婦の友社 昭和五四、三〕
そして、作品の世界では、根拠を伴わないかたちで表現されている、つまり謎の女であるところの「へ与える喜び」、「無垢な心の持ち主」であるマクダラのマリアであったことを矢代は、「心根の方は、大袈裟に言うなら頂点に立っているイジラシイ女」だと言う。

そのひとつの典型的な存在として宮城野を描いて見せたわけであるが、結論は、「俺の宮城野はこんな女じゃねえや」という写楽の声が、どこからか聞こえてきたのである、〔写楽考「前口上」〕
と言うことだったのである。

その経緯に関しては繰り返しになるので触れないが、写楽を写楽たらしめる存在としての宮城野ではなかった、換言すれば「判ってしまった女」だった、という意味で、もうひとつの特色である背理性をもった存在であるという意味での「謎の女」としての魅力が失われてしまった存在でしかなかったのだ、ということだったのである。

人間の可能性に終始依存し続ける存在であること、換言すれば因果律のなかで説明がつく存在に

なつてしまい、背理性を暗示する機能、つまり、神秘的な愛を暗示することの可能性を喪失してしまつた存在である、と言う反省がここにはある。

*
*
*

矢代は、「写楽考」の自註で、大変魅力的な女性お米について、次のように述べている。

《なぜ私がお、よ、ねのような女性をとりあげたかと言いますと、現代人の愛はエゴイズムにみちみちていると思うからなのです。つまり他人を考えない自分だけの愛という考え方が多い。そこで私はお、よ、ねに託して、世界中のどこかに、今もいるに違いない名も無いマリアを描きたかつたわけです。》

お、よ、ねの、すべてを包むようなおらかな愛は、たしかに最後は失敗に終わりました。けれど、お、よ、ねのようにおのれを殺した犠牲的な愛によって、世の男性は救われるのです。》（『ある女の一生』『愛情教室』中央出版 昭和五一、一）

矢代は、お米を描くことによつて、彼が理想とするヘイジラシイ女、つまり、へ与えることに喜びを感ずる、へ無垢な心の持ち主を、まず、「宮城野」の次に書かれた「写楽考」において形象し、表現しようとした意図を見ることができるところである。

〈名も無いマリア〉という表現のなかに矢代がイメージしている愛の理想状況は、カトリックの信仰の世界で言うところのイエスの母マリアの愛を想起せしめるものではないか、と思われるとこ

ろである。

しかし、矢代の、イエスの母マリアに関する思いを述べたところを見ると、矢代のイエスの母マリア理解には、少なくともその表現において、「正直言つて、私はペテロやユダについては、なにか皮膚的に理解できるのですが、聖母マリアについては、もう一つ馴染めないのです。」〔中略〕庶民性をもった雲上人といった感じなのです、という表現がよくその雰囲気を表しているように、たとえば愛のリアリティを母性性において表現しようとした遠藤周作の「母なるもの」とは微妙に異なっていることに気付くことができるのである。矢代の表現をもつてすれば、「聖母マリア」と「イエスの母君」との差、ということになるのであろうが、おそらく「創世記」において、神が予言したように、「邪悪なる者は、マリア（イエス）によつて滅ぼされ」ているという叙述を踏まえながら、「私にはイヴの延長上にマリアが置かれているということが興味深い」い、つまり、「神は、イヴの人格とマリアの人格という両極端の存在の間を振子のようにゆれ動く者として、女性をお創りになったようです。言いかえれば、魔性と聖性を女性にお与えになったことになるでしょう。更に突っ込んで考えれば、女性の裡には、誰でも、イヴ的要素とマリア的要素が同居しているのではないか。そして、男は、（すくなくとも私は）マリア的要素に憧れると同時に、イヴ的要素にも惹かれる。ここが、男の厄介なところだと思っています。女もまた自分の裡にイヴ的要素がひそんでいることを知っているのです、よけいに、マリアを理想的女性として崇めるのではないのでしょうか」〔聖母マリア〕（二、同前）、というように、理想としてのイエスの母マリアの、「こういう女性が地上

に存在していたという事実が、私たち人間にこよない励ましと慰めを与えてくれるのです、という面影をとどめている存在への憧憬を持っていると同時に、人間存在であるがゆえの破れ、愛の不可能性における人間の、とことんぎりぎりのところで生きている者のもっている魅力、リアリティに支えられている存在——具体的に言えばマグダラのマリア——に対してかぎりない同情と共感とを抱かざるを得ない作家矢代を見ることができるところなのである。

*

「写楽考」は、寛政六年五月から約十ヶ月の間に百四十点を越える歌舞伎役者の大首絵を描いて、また忽然と姿を消してしまった謎の絵師写楽の物語である。

ドラマの前半は、彼がまだ伊之と名乗っており、後の浮世絵師歌麿——当時は勇助と名乗っていた——とともに、絵師としての修行時代のエピソードが語られている。

勇助との間にお春という不義の子供を生んだ日本橋袋物問屋くの屋の女房お加代は、その子をお伊之に押し付けようとする。それを拒む伊之。へじゃ、いいや、捨子にしよう、というお加代。その加代はへ性行為で恍惚状態になりながら自殺すること（「ある女の一生」）をお伊之に助けてくれるように迫る。事に臨んで伊之は拒絶するが、自殺を遂げようとして死にきれずに苦悶している加代への同情から、のどにへ中途半端に突きささったままの包丁に手をかけたところに、くの屋で下働きとして働いている女性、お米が登場する、そんな場面が展開するところである。

《伊之 お米ちゃんは、捨て子だったつけ。くの屋の用水桶の上で、寒い冬の朝、赤ん坊のお米ちゃんが、オグ、オグ、オグと虫の息で泣いていたんだってな。それが、あわれで……。オギヤア、オギヤアと元気に泣いていたんなら、家へ引き取りやしなかったと、おかみさんがいつてたぜ。世の中、面白く出来てらア。おい、もう、やめろつたら、泣くのは。》〔第一幕 4〕

お米は捨て子であった。それが、お加代に拾われて育てられた娘で、今は十八になっている。

彼女は拾われたときから、惨めで哀れな存在だった。へオグ、オグ、オグと虫の息で泣いていたという表現がそのことをよく伝えている。

捨て子であるということは、彼女がその本質において孤独であることを表している。それはまた、人間関係の確かさは、血縁によるものではないことを表現するのにふさわしい存在だということでもある。この問題は後にお春について触れるところでも問題になるところであり、リアリズム文学との違いを見ることができるところであるが、問題は本人がどのようにしてそのことに目覚めているか、換言すれば、何を契機として人間として成熟していくかということである。

《お米 おわらないんです。――涙が。私、涙ってきらいなの、だって、何の役にも立たないもん。でも、私みたいな女は……これから、ずっと……そうよ、生きていくかぎり、私の涙はなくならないでしょう。》〔同前〕

一面において、お米のけなげな様子をよく表しているところであるが、涙が嫌いな生きかた、しかも何の役にも立たないもん」という発想は、人間として、不幸であることを表している。涙

の効用を考えなくてはならない人生は、あまりにも功利的であるし、淋しい、ある意味では貧しい人生ですらある。

そのような人生を送っているお米の生きかたが消極的なのは無理もないことかも知らない。

《お米 私は、なんだか、生れたときから、私のやることはきめられているような気がしてならないんです。だから、うまく言えないんですけど、あれもやろう、これもやろうと欲張るのはよくないんじゃないかと思うんです。やろうと思わないこと。なんでもやらないこと。その方が正しいような気がしてならないんです。》〔同前〕

ここには、一種の宿命観を見ることができ、お米の発想はいかにも消極的である。かいがいしく立ち働いているお米でありながら、その発想の根源に巣くっている宿命観や消極性は、服従的な生きかたをしているかぎり問題にはならないが、やがてその発想の枠を打ち破らなければならぬときがくる。それは、他者との関わりを持たなくてはならないときに、好むと好まざるとにかかわらず、迫られる決断というかたちで顕在化してくるのである。それがお米の人間としての成熟に向かう出発点でもある。

《お米 そんなこと、私、いまのいままで考えもしませんでした。あなた様にそんな風に言われて、ただ、もうびつくりしてしまつて……ね、教えて下さい、私は、伊之さんが、好きなのではないか?》〔第一幕 6〕

登場人物のひとりであり、後の人情本作家十返舎一九の幾五郎に、伊之に魅力を感じているので

ないと思うのです。」「ある女の一生」]

宮城野がそうであつたように、お米もまた矢代によつて聖性を与えられた女性なのである。へ心根のいじらしき」は、そのことを物語っている。

矢代はさらにお米が、へ普通人なら誰でも持つてゐるような世間智、人生を生きていくための生活上の知恵とか、処世術というものを持ち合わせていない」〔同前〕ことを、伊之がお加代殺しの犯人ではないのに、そうだと早合点して役所に届け出てしまうという行為の理由として述べている。そして、へなぜそうしたかと言いますと、お、お、ねはひそかに伊之のことを愛してゐたからなのです」このことである。つまり、彼女の愛についての考え方そのものが、へ普通のひとちよつと違ふ」このことを表す方法として、そのような行為をするお米として描かれてゐるというのである。

作品ではこのところは、

《お米（気が転倒してゐる）私、私、伊之さんのことが好きだつたんだわ。やつと分つた。だから、だから……。》〔第一幕 6〕

と描かれてゐる。私は伊之が好きである。それにも拘わらず伊之を役所へ訴えてしまった。——この逆説の論理を矢代はお米の愛に関する不条理性として表現しようとしているのである。この背理性を作品のなかで、たとえ暗示的にでもせよ表現していくことは、まことに困難なことと言わなくてはならない。あくまでも日常性のなかで、神などという言葉は一切用ゐることのできない時代と社会のなかで、表現しなくてはならないのだから。

「お米 私、伊之さんのことが好きだから、伊之さんを卑怯者にしなくなかったの。ちゃんと、お上に自首するような、いい人になってほしかったんです。分つてください。」〔第一幕 8〕

「卑怯者にしなくなかった」、へちゃんとお上に自首するような、いい人になってほしかった、という表現からは、矢代の自作に託した創作意図を直接的に読みとることは困難ではないだろうか。一見するところ、いささか倫理的にすぎるとも思える理由開陳の場面なのである。ましてや、加代の産んだ赤ん坊を引き取るときの決断が、へちゃん坊とめぐりあつたのは天の命令とか、神様のおぼしめしだとか、そういうふうと考えてしまうわけです、というところに到つては、文学作品に対するコメントであるという意味では言語道断ともいふべきもの言いでさえある。

矢代のこのような自註は、創作意図を述べたものであるというよりは、むしろ一種の解釈だと思うべきものではないだろうか。もち論、へこの随想集は、ハヤット神父が企画なさっている「心のもしび」ラジオ、テレビ番組のために書いた原稿が殆どです。「あとがき」「愛情教室」というように、宗教に力点の置かれた場での発言だということを念頭に置かなくてはならないものではあるが、作品論としては、あくまでも作品を通してそのことを表現しなくてはならないのであつて、決して自明のことからではないのである。

たしかに、お米の行為は愚かしいものであるにちがいない。へ利口になりすぎてしまった私たち現代人の心を、奇妙にゆさぶるような存在だということは言えそう。「ある女の一生」である。そして、その理由が何であるかを知りたいと思うのもまた自然のことなのであるが、ここではいちおう、